地理学報告　第 119 号　123 ～ 128　2017

鎌倉市「御谷の森」の環境保全に果たす市民運動の役割
－公益財団法人鎌倉風致保存会を事例に－

荒木隆寛[1]・脇田倫宏[1]・長谷昇知[1]・中西　悠[2]
([1] 愛知教育大学・学，[2] 岡崎市立豊富小学校)

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　鎌倉風致保存会の活動
Ⅲ　御谷の森ならびに鎌倉風致保存会に対する地域社会の認識
Ⅳ　おわりに

キーワード：鎌倉風致保存会，御谷の森，ナショナルトラスト運動，神奈川県鎌倉市

Ⅰ　はじめに

1.　研究の背景と目的

近年，日本を訪れる外国人観光客は年々増加しており，なかでも京都・奈良・鎌倉といった日本固有の歴史的景観がみられる地域が，外国人観光客の人気を集めている。こうした歴史的景観地区の多くは，当該行政のみならず地域住民の運動や努力によっても保全がなされ，今日に至るまでその景観が維持されてきた（亀井 2011）。たとえば 1966 年制定の「古都保存法」は，神奈川県鎌倉市で 1964 年に実際に生じた「都市の自然環境」の保全を求める市民運動が契機となって成立したといわれている[1)]。

1960 年代，日本が高度成長期に突入すると宅地造成ブームが起き，日本各地で乱開発が進んだ。本研究の対象地域である鎌倉市の鶴岡八幡宮の山林「御谷の森」（おやつのもり）にも，同様に開発の波が及ぶことになる（図 1）。御谷の森の開発を食い止めるための市民運動は，鎌倉市民や鎌倉在住の作家・大佛次郎を中心とした文化人に始まって，やがて全国へと広まった[2)]。その過程で「鎌倉風致保存会」が設立（1964 年 12 月）され，市民による募金活動を通じて御谷山林が買い上げられた（この一連の運動を「御谷騒動」とよぶ）。これが日本初の「ナショナルトラスト運動」[3)]として報じられると，それをきっかけにして 1966 年の古都保存法成立へと至ったのである。鎌倉風致保存会は，現在も公益財団法人として活動を行っている。鎌倉市のまちづくりは，少なからずこうしたナショナルトラスト運動による影響を受けており，歴史的景観の保全と地域住民との結びつきの強さがうかがえる好例である。

ナショナルトラスト運動をめぐる既存研究は，住宅建設やまちづくりなど建築学の視点による研究が挙げられる（米山 2000）。また，ナショナルトラストの手法を用いた景観保全に NPO が果たす役割に関する研究もすでにある（金川 2000）。しかし，日本版ナショナルトラスト運動の端緒と評される鎌倉風致保存会それ自体に焦点を当てた事例研究は少なく，保存会による活動が都市の自然環境保全に与える影響やその課題の解明は不十分である。

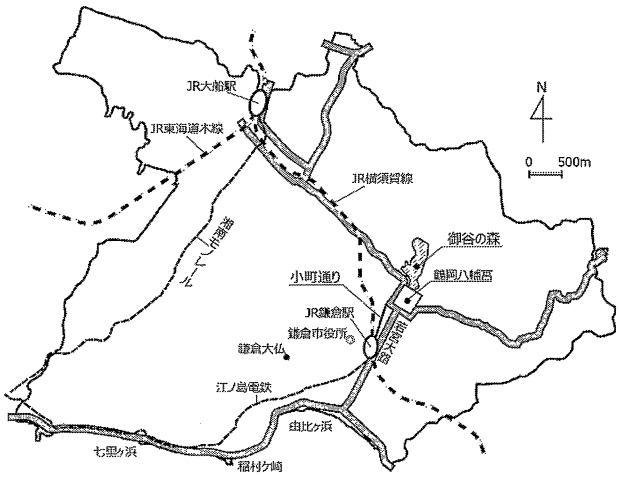

図 1　神奈川県鎌倉市における「御谷の森」の位置

図 2　小町通り入口の鳥居（JR 鎌倉駅側）
（2017 年 3 月 8 日，阿部亮吾氏撮影）

そこで本研究では，現在の鎌倉風致保存会が実際にどのような活動を展開しており，一方でそうした活動を地域社会がどのように評価しているのか，またそのことが，御谷の森の認知度や保全にいかにつながっていくのかを明らかにしたい。本研究の成果が，市民運動による都市の自然環境保全と地域社会との関係性を考えていくうえで，貴重な資料となることを期待している。

そのため，本研究ではまず鎌倉風致保存会に聞き取り調査（2017 年 3 月 7 日）を行い保存会の活動内容や現状を把握するとともに（Ⅱ），御谷の森ならびに鶴岡八幡宮の地元として小町通り商店街（若宮大路の 1 本西側にあって，鶴岡八幡宮から JR 鎌倉駅鳥居前までの約 360m）（図 1, 図 2）でアンケート調査（2017 年 3 月 8 日）を実施し，御谷の森ならびに鎌倉風致保存会に対する地域社会の認知度や活動評価を分析した（Ⅲ）。

2.　対象地域の概観

御谷の森とは，鶴岡八幡宮の裏山一帯の山林を指し，鎌倉時代には鶴岡八幡宮寺の二十五坊（僧房）が立ち並ぶ「聖地」であった。また，御谷の森の北正面の山は 1,500 年前から「さん踞峰」（さんこくほう）とよばれる「霊地」として，長らく修業の場であったという[4]。ところが，高度経済成長期の 1960 年代に入ると，御谷の森は前述の通り都市開発問題に直面し，それに反対する市民運動が起こった。結果的に，全国からの寄付金や鎌倉市からの援助金を合わせ 1,500 万円で山林 1.5ha が買い取られ，保全されることになった。それが本研究の対象地域である御谷の森である。

図 3　鎌倉風致保存会の事務所付近の様子①
（2017 年 3 月 7 日，筆者ら撮影）

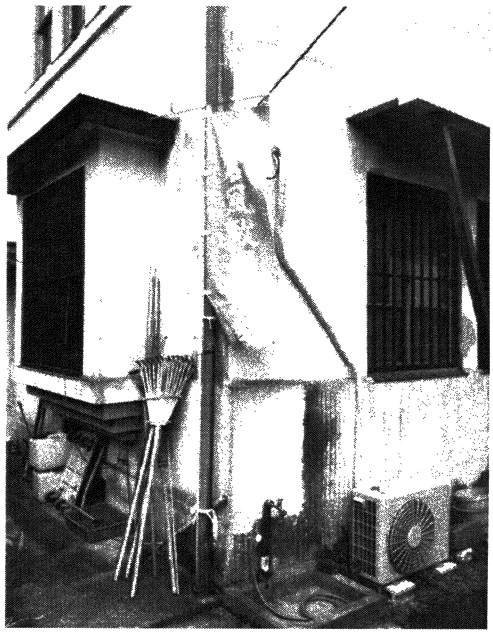

図 4　鎌倉風致保存会の事務所付近の様子②
（2017 年 3 月 7 日，筆者ら撮影）

Ⅱ　鎌倉風致保存会の活動

1.　鎌倉風致保存会の概要

1964 年 12 月に発足した鎌倉風致保存会（図 3，図 4）は，1998 年から会員制の団体となり，2017 年 3 月現在は個人会員と法人会員合わせておよそ 400 会員となっている。その他，会員ではないが，ボランティア活動として参加する学生や企業も存在する。

鎌倉風致保存会の主な活動は，毎月 1 回行われる「緑と歴史探訪」などのイベントや，週に 1 回の所有緑地の保存活動（みどりのボランティア）である。また，

鎌倉市内の中学校に出向き，総合的な学習の時間を利用して，中学生に草刈り体験などを指導している。これらの活動は，鎌倉市の緑地・建造物等に対する実際の保全事業のみならず，地域住民に対する自然環境保全の意識啓発や普及を主な目的にしているという。

なお，今後の課題は活動の財政面ならびに充実面を考えてさらなる会員数の増加を図ること，加えて相続の問題から明治期以降の歴史的建造物が取り壊される傾向にあるため，市や専門家と協力してその保護を推進することであるという。

2.　会員の現況

鎌倉風致保存会の400会員のうち，50～70歳代の高齢者の割合が高く，保存会の活動に定期的に参加する会員は毎回ほぼ固定されていて20～30人ほどである。鎌倉市内には性格の類似した団体がいくつかあり，複数の団体に参加している会員もいる。会員の居住地は鎌倉市内が約40%，隣接の藤沢市と横浜市が合わせて約60%となっており，性別でみると男性が約60%を占めているという。

鎌倉風致保存会の活動に参加経験がある人を対象に行った2015年度のアンケート調査[5]によると，鎌倉風致保存会に「入会」した主な動機は「『みどりのボランティア』に参加するため」(26.4%)，「各種イベントに参加するため」(6.1%)，「会費による支援を行うため」(52.8%) であった。この結果から，保存会の活動に定期的に参加している1割未満の会員以外は，基本的には活動への参加に強く動機づけられているというよりも，会費による支援にとどまっているものと推察される。こうした会員にいかにして実際の保全活動に参加してもらうか，さらには会員の高齢化が進んでいるため，次世代の会員をいかに育成していくかということが，今後の課題となっている。

3.　鎌倉市との連携

鎌倉風致保存会は，もともと鎌倉市の出資により財団として発足された団体である。市は今でも，鎌倉の歴史的景観と豊かな自然環境を後世に伝える活動を展開している鎌倉風致保存会に，運営補助金を交付しているという。また，鎌倉市風致保存基金を設置し，風致保存基金への寄附金を鎌倉風致保存会に交付している[6]。

現在では，鎌倉風致保存会と市は特段の連携を取っているわけではものの，そうしたなかで市と鎌倉風致保存会が共催する「里山フェスタ」は重要なイベントとして捉えられている。

Ⅲ　御谷の森ならびに鎌倉風致保存会に対する地域社会の認識

Ⅲでは，御谷の森周辺の地域住民が，御谷の森ならびに鎌倉風致保存会の活動をどの程度認知し，またいかに評価しているのかを分析する。このことから，鎌倉風致保存会が地域に与えている影響を明らかにできると同時に，保存会における今後の方向性や，保存会に求められている課題等が示唆される。

本研究では，鶴岡八幡宮前からJR鎌倉駅までつづく小町通り商店街の商店で働いている人や来街者に対して対面形式のアンケート調査を実施した。小町商店街は鶴岡八幡宮と一体となって観光地化されているため，平日でも多くの観光客で商店街はにぎわっている。ただし，今回の調査では地域社会の認識を重視したため，来街者のなかで市外からの観光客は調査対象外とした。アンケート調査の総回答数101件のうち，有効回答数は92件であった。

1.　居住地による差異

小町通りの商店街で働いている人の場合，必ずしも鎌倉市居住者とは限らないので，居住地ごとに御谷の森と鎌倉風致保存会に対する認知度を表した（表1)。表1によると，鎌倉市居住者（62人）は御谷の森を認知している人が21人（33.9%）であり，鎌倉風致保存会に至っては41人（66.1%）と高いのに対して，市外居住者（30人）になると鎌倉市に隣接する藤沢市や横浜市，逗子市でさえ御谷の森・保存会ともに認知度が大きく低下することが分かる。

日本版ナショナルトラスト運動発祥の地である御谷の森や，そこで活動を行っている鎌倉風致保存会の認知度は，地元商店街で働いているからといって高まるわけではなく，「居住者」として鎌倉市内で日常生活を送っていることが重要なのであろう。ただし，鎌倉市居住者でも御谷の森に対する認知は3人に1人程度と決して高くない。

2.　鎌倉市居住者の年齢層による差異

1で明らかにしたように，御谷の森・鎌倉風致保存会ともに鎌倉市内の居住者の認知が重要な意味をもつ。そこで，2では居住地が鎌倉市内の者に着目する。

表2は，鎌倉市居住者の回答を年齢層別にまとめたものである（総回答者数61人)。表2によると，保存

表 1　「御谷の森」ならびに「鎌倉風致保存会」に対する居住地別認知度

居住地			「御谷の森」を認知しているか？				保存会を認知しているか？			
			している		していない		している		していない	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
鎌倉市	62	67.4	21	33.9	41	66.1	41	66.1	21	33.9
藤沢市	11	12.0	2	18.2	9	81.8	3	27.3	8	72.7
横浜市	11	12.0	3	27.3	8	72.7	3	27.3	8	72.7
逗子市	4	4.3	0	0.0	4	100.0	0	0.0	4	100.0
その他	4	4.3	1	25.0	3	75.0	1	25.0	3	75.0
計	92	100.0	27	29.3	65	70.7	48	52.2	44	47.8

（アンケート調査より作成）

表 2　鎌倉市居住者の「御谷の森」ならびに「鎌倉風致保存会」に対する年齢層別認知度

年齢層			「御谷の森」を認知しているか？				保存会を認知しているか？			
			している		していない		している		していない	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
10代	6	9.8	2	33.3	4	66.7	4	66.7	2	33.3
20代	7	11.5	1	14.3	6	85.7	3	42.9	4	57.1
30代	8	13.1	0	0.0	8	100.0	4	50.0	4	50.0
40代	15	24.6	2	13.3	13	86.7	9	60.0	6	40.0
50代	10	16.4	4	40.0	6	60.0	7	70.0	3	30.0
60代	7	11.5	4	57.1	3	42.9	6	85.7	1	14.3
70代以上	8	13.1	7	87.5	1	12.5	8	100.0	0	0.0
計	61	100.0	20	32.8	41	67.2	41	67.2	20	32.8

（アンケート調査より作成）

会の認知度はおおむね年齢層にともなって高くなっており，20 代をのぞいてどの年齢層でも半数以上がその存在を「知っている」と回答した。一方で，御谷の森の認知度は年代によって大きな差異が浮き彫りとなった。たとえば，10 代～ 40 代まで（36 人）の認知度はたった 14% 程度であるのに対し，50 代以上になるとそれが 60% に跳ね上がるのである。

こうした年代による傾向の差異は，鎌倉風致保存会の活動評価にも影響している。図 5 と図 6 は，保存会の存在を「知っている」人（41 人）を 2 つの年代に分け，その活動を 5 段階で評価してもらったものであるである。10 ～ 40 代は「どちらともいえない」と回答した人が 60%（12 人）を占めている（図 5）。その理由は，「どのような活動をしているか知らない」「活動を見たことがない」という回答が大半であった。一方で，50 代以上は「非常に評価する」「評価する」を合わせて 70%（14 人）が好評しており，その評価が年代によって大きく割れていることが読み取れる。50 代以上の鎌倉市居住者は，1960 年代の御谷騒動を直接経験したか，あるいはその後聞き知っている可能性が高く，鎌倉風致保存会の設立経緯やその活動に触れていることが評価を押し上げているものと推察される。他方で，10 代の 4 人全員が鎌倉風致保存会の活動を「非常に評価する」ないしは「評価する」と回答している。これは学校の地域史の授業で御谷の森について習い，鎌倉風致保存会が主催する緑の学校にも参加した経験をもっていることから，保存会への高い活動評価につながっているのだという。

以上のように，御谷の森と鎌倉風致保存会に対する認知度，そして保存会への活動評価は，おおむね 40 代までと 50 代以上とで大きな差異が生じていることが明らかにできた。

3.　御谷の森と鎌倉風致保存会の関係性

最後に述べておきたいのは，御谷の森に対する認知度が，鎌倉風致保存会のそれに比べて明らかに低いという事実である。本アンケート調査では，御谷の森を「知っている」人は保存会についても必ず認知しており，逆に保存会を「知らない」にも関わらず御谷の森だけを認知している例は 1 人もいなかった。このことから，御谷の森の認知度は鎌倉風致保存会への認識に大きく依存している可能性が示唆される。つまり，御谷の森自体の存在は世間にあまり浸透しておらず，鎌倉風致保存会という団体を介して，はじめて御谷の森の存在にも触れる可能性である。

実際に，鶴岡八幡宮周辺には御谷の森の存在を明示するような看板はなく，森への入り口に立て看板が 1 つひっそりと佇んでいただけであった。このように，

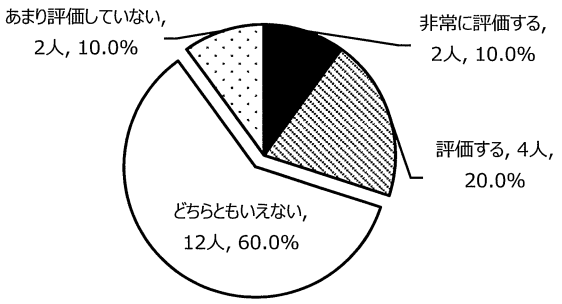

図5　鎌倉風致保存会の活動評価（10～40代）
（アンケート調査より作成）

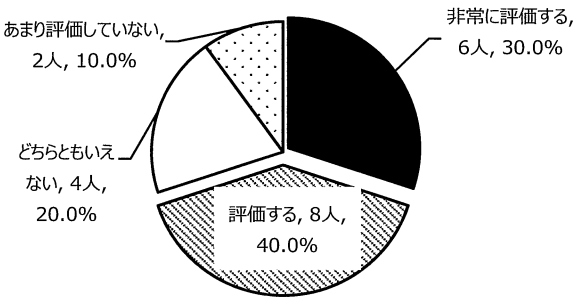

図6　鎌倉風致保存会の活動評価（50代以上）
（アンケート調査より作成）

御谷の森は鶴岡八幡宮の景観の一部を構成してはいるものの，日本初のナショナルトラスト運動によって守られた土地という背景と鎌倉風致保存会の存在があってはじめて，地域住民にとって意味ある自然環境になるのである。

なお，鎌倉風致保存会の活動を知る手段は，「地元で有名な話」「学校で聞いたことがあるから」と回答した人が4割ともっとも多く，保存会の会報やホームページを見た人の割合は2割強にとどまった。日本のナショナルトラスト運動史にその名を刻む鎌倉風致保存会は，地域住民が実際にその活動を目にしたり，あるいはメディアを通じて多くの情報を得たりするというよりは，もはや学校教育のような場で教授される「郷土史」の一部として耳目に触れるような存在であることが示唆される。

上述の通り，鎌倉市内と市外で御谷の森の認知度に差異が出たのも，おそらくはここに理由がある。すなわち，市内居住者でさえ御谷の森が生活の場で目にする日常的な景観というわけではなく，鎌倉市内に在住もしくは育ったりすることで鎌倉風致保存会を知り，そこから御谷の森がもつ背景や地域情報を得ていることが大きいのではないだろうか。そうでなければ，御谷の森は鶴岡八幡宮の裏山にある「都市の自然環境」のひとつに過ぎないかもしれないのである。

Ⅳ　おわりに

本研究の調査結果から，1960年代に宅地開発の波から御谷の森を守り，古都保存法のきっかけとなった日本版ナショナルトラスト運動のパイオニア的な存在として，鎌倉風致保存会はすでに郷土史の一部となっており，鎌倉市においてその存在意義は大きいということが理解できた。

一方で，40代までの年齢層と50代以上とでは保存会の活動に対する評価が大きく異なっていることが明らかになった。加えて，御谷の森の認知度が50代以上の鎌倉市居住者で高く，10代～40代で低くなるのも，鎌倉風致保存会に対する直接・間接的な接触経験の量に左右されていることが示唆できた。他方で，学校教育を通じて保存会の活動に参加している10代の場合，御谷の森への認知もまた得られやすい。なお，風致保存会への聞き取り調査によれば，鎌倉市内9中学校のうち7校が保存会の活動に参加した経験をもっているという。

以上より，将来にわたって御谷の森の保全を進めるには，鎌倉風致保存会の存在意義や活動に対する地域住民の理解が不可欠であり，中学校のみならず高校や大学，社会人への普及・啓発活動を通じて幅広い年齢層に理解を呼びかける仕組みが必要である。Ⅱの2で示したように，活動に参加する会員の減少や高齢化も進んでおり，次世代会員の育成や地域住民への普及活動が，鎌倉風致保存会の目下の課題であろう。そこで会報や新聞といった紙媒体だけでなく，SNSを活用したイベント・活動の告知，企業や学校と提携したPR活動のいっそうの充実が肝要である。もちろん，御谷の森それ自体の存在価値を地域社会に浸透させる努力や仕掛けも望まれる[7]。

本研究では，神奈川県鎌倉市にある御谷の森と鎌倉風致保存会を取り上げ，都市の自然環境保全と市民運動との関係性について考察した。ただし，鎌倉市の一事例をそのまま他都市・地域に一般化することは難しく，今後も多くの事例研究を積み重ねていく必要性を感じている。

謝　辞

本研究の調査にあたり，ご多忙のなか鎌倉風致保存会の方々には聞き取り調査にご協力賜り，また鎌倉市役所都市調整部風致課の方々にもメールでの質問にご対応いただいた。小町通り商店街や来街者の皆さまにも，快くアンケート調査にご協力いただいた。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

注

1) 公益財団法人鎌倉風致保存会ホームページ（http://userweb.www.fsinet.or.jp/fuhchi/）（最終閲覧日:2017年7月18日）参照。

2) 一般社団法人グリーンエデュケーション・ホームページ（http://www.egreen.or.jp/）（最終閲覧日：2017年7月18日）を参照。

3)「ナショナルトラスト運動」とは，もともと19世紀のイギリスで産業革命によって消えゆく貴重な自然環境を守る運動として始まったものであり，対象となる土地を寄付や買い取りによって入手し，人々の手で維持管理していく手法に特徴がある。なお，日本では現在50以上の地域においてナショナルトラスト運動が展開されているという。公益財団法人日本ナショナル・トラスト協会ホームページ（http://www.ntrust.or.jp/index.html）（最終閲覧日：2017年7月20日）を参照。

4) 前掲1)「鎌倉風致保存会だより」の「御谷山林」（http://fuchi.na.coocan.jp/oyatsu.html）（最終閲覧日:2017年7月18日）を参照。

5) 鎌倉風致保存会提供資料による。本アンケート調査は，国土交通省都市局の2015年度事業「古都における歴史的風土の保存方策等に関する検討調査」（受託者は株式会社スペースビジョン研究所（大阪市中央区））の一環として行われた調査である。

6) 鎌倉市役所都市調整部風致課に対するメールでの聞き取り調査（2017年3月21日実施）による。

7) たとえば，御谷の森へのルート整備や案内看板の刷新，一般観光客を視野に入れた御谷の森へのエコツーリズム的な案内ツアーの企画などが考えられる。

文　献

金川幸司 2000．景観保全における市民及びNPOの役割に関する研究－トラスト手法を中心として－．文化経済学 2-1：55-62.

亀井由紀子 2011．歴史的環境保全地区における住民活動の機能評価に関する研究－橿原市今井町重要伝統的建造物群保存地区を事例として－．日本建築学会計画系論文集 76-670：2381-2386.

米山淳一 2000．ネットワークによる民家再生活動－財団法人日本ナショナルトラストと歴史的建造物の保護活用－．建築雑誌 115-1455：50-51.